



■ フォトエッセイ ■

貧困に負けない人びと —フィリピンの都市貧困区を訪ねて—

写真・文 岡部 正義
Masayoshi Okabe
写真 後藤 圭佑
Keisuke Goto

サマル島からマニラへ戻る船から臨んだ夕陽。南国の夕陽はとても鮮烈だ

●初めてのスラム滞在

二〇〇九年夏、開発経済学の受講学生三〇余名でマニラや東ヴィサヤ地方それぞれの貧困の実情を滞在して観察する調査に参加した。マニラといってもマカティイのような中心街ではなく、マニラ北部のカマナバ(CalManaba)^①と呼ばれる洪水多発地域のひとつ、マラボン市にある「P地区」と称されるスラムだ。さらに東ヴィサヤ地方サマル州の農村・漁村にも訪れた。スラムといえば、廃品回収などの雑業や物乞いに従事し、低い生活水準にある都市貧困層がインフォーマル部門を形成していると経済学では解釈される(参考文献^③)。日常的にスラムと聞くと、貧民窟やドヤ街、ときには犯罪や麻薬の温床といったイメージがあり、不衛生で感染症の心配も連想される。例に漏れず、私もスラムに行くとき初めて聞いたときには同様の負のイメージを持った。

●やっぱり「イピス」は怖い!

マニラ市街地を走る高架鉄道(LRT)に乗って、最北端モニユメント駅で下車し、さらにジープニーに乗って北上すること三〇分ほど。それまでの活気あるショッピングモールや商店街の景色から、眼前に広がる光景が変わり始める。だんだんと廃棄物の山々が増え、道路は濁水で河のようになっている。この地域は標高が低く、潮位の変動によって容易に冠水するためだ。そこを裸足やサンダルで人びとが往来する。足には発疹も見られ、不衛生さを物語る。ゴミの臭いで空気も悪い。「イメージどおりだ」というのが正直な感想だった。

P地区に到着した。中は迷路のように入り組んでいる。ベニヤ板とブロック塀、トタン、コンクリートを組み合わせ、簡素に作られた家が隙間ない。濁水やゴミから出た水が水たまりをあちこちに作り、悪臭も漂う。「ついに来て



映画のワンシーンのような熱帯林（サマル州）



LRTの架線下に広がる露天マーケット



庶民の足のジープニー（右奥）とトライシクル（左手前）



後藤が宿泊したスラムの一家。家族は一部屋に並んで寝るのが普通である

しまった」。そんな日本人の戸惑いをよそに、我々が成す列を多くの子どもたちが取り囲む。笑顔と好奇心に満ちあふれ、黒くて大きな瞳がとてかわいらしい。

何もかもが違うこの地区で、「なんだ、スラムの人も同じだな」と感じた、ちょっとした卑近な体験をした。私は女性だらけのC家に宿泊することになったのだが、灼熱の道中でかいた汗を流そうとシャワー⁽²⁾を借りたときのこと。ふと壁を見ると黒くてカサカサと動く物体が目にとまる。そう！日本人なら誰も忌避するあの虫だ（しかも大きい！）。ただ、スラムに行く決めてから虫や鼠ごときで驚いてはいけけないと周囲の先輩から忠告されていたので、その心の準備もあつてか、達観してそのまま水を浴びることができたのである。その後、夕食を家族ととっていると…。

“Ah!! Ipiis!! (アー!! イピス!!)”

いちばん稼ぎ頭の三女が絶叫した。その叫び声たるや阿鼻叫喚^{びきょうかん}がごときであった。そして、殺虫剤を辺り一面に噴霧し、“Oh my god!!”と連呼していた。Ipiis (イピス)とはタガログ語でゴキブリのことだ。廃棄物の山と隣り合わせのこの地域⁽³⁾にイピスがいるのは珍しくないのでは？と思った。しかし、そんなこの地域の人々でもやっぱりイピスは怖いのだ。その共通の感覚にどこか安心させられたものだった。

●生活水準の向上—教育が一原動力に—

外に出て人びとのようすをみていると、思ったよりも生活ぶりが良いことに気づき始めた。テレビや扇風機、パソコンなど耐久消費財を所有し、驚くことにカラオケを持つ世帯すらあるのだ。地区の中心の小屋には、旧機種であるもののゲームセンターの機器があった。子どもたちはプレイド式携帯を持ち、メールに耽^{ひび}っている⁽⁴⁾。人びとは食糧をサリサリストアという小規模雑貨店（詳細は参考文献③）や市街地のスーパーマーケットに買いに出かける。ジョリビーというファースト・フード店は若者に大人気。こうした日常のようすはスラムと聞いてまったく想像していなかったことばかりだ。

もちろん、このような生活水準には及びもつかない人びと（特に病人や障がい者、性的マイノリティ）もこの地区には住んでいる。この地域のランガイ・カガワッド（村議会議員に相当）に質問したところ、生活水準上昇の背景のひとつに、フィリピンお決まりの「出稼ぎ」のストーリーと、さらには「教育」があるという指摘があった。この地区では、外部NGOの援助も受けて教育支援プログラムが実施されており、スラムの中央には小さな図書館もあった。驚くことにはこの地区から、国内最難関の国立フィリピン大学（UP）合格者も出ていて、その彼がUPを案内



滞在したスラムの屋内（後藤と子どもたち）



フィリピンの頭脳、フィリピン大学（UP）。P地区から合格した青年が案内してくれた



屋内にはマリア像がつつましく飾られている。キリスト教文化に溶け込んでおり、フィリピンをしてアジアのなかのヨーロッパと称されるのも納得させられる

してくれた。貧困であろうとそうでなかつても、どこにも学ばない子どもはいない。そうつよく確信させてくれた。よく考えれば、子どもが携帯電話でメール（テキスト）に耽っている光景も、注目に値する。それだけ識字が浸透していることを示唆しているからだ。ただ、同じ都市貧困地区でも、例えばダバオでは識字が浸透していないためテキストに興じる人びとも限られるという（参考文献①一二九ページ）。同じ都市貧困といっても、状況は地域によっても異なるのだろう。

とはいえ、人びとの生活をみていると教育などによって雇用や賃金が改善することは別次元の幸福さ、人生の楽しさを少し学んだ気もした。日本人が忘れかけている地域や友人の稠密なつながりがそのひとつなのかもしれない。

教育が貧困削減にとって重要ということは言を俟たない。しかし、教育が逆に社会階層の固定化と格差をもたらす可能性もある。スラム内部でも「持てる者」と「持たざる者」の内部格差が生まれつつあるかもしれない。目下、フィリピンでは教育制度改革が動き出している。スラムを訪れた際に肌身で感じたように、この国が有する人的資源は豊富な若年人口だ。貧困に負けず勉強に精を出す子どもたちがスラムにも確実に存在した。彼ら彼女らが教育という諸刃の剣を活かしてどう貧困と戦っていくか、この国の未来がかかっている。

【付記】

本稿を執筆するにあたり、中西徹教授（東京大学）の調査地であるP地区を取り上げることが同教授にからご許可いただいた。記して感謝申し上げたい。

《注》

- (1) Caはカローカン、Maはマラボン、Naはナボタス、Vaはヴァレンスエラの各地区を指している。
- (2) シャワーといっても、ブロック塀で囲まれ、くみ取り式トイレ



スモーキーマウンテン（第二世代）とその後ろに広がるスラム。危険な廃棄物が地面に数多く散乱しており、裸足で歩くのはとても危ない



P地区の内部のようす。無邪気に遊ぶ子どもたちのかわいらしさと笑顔は万国共通だ



農村の田んぼと水牛。耕しているのだろうか、散歩だろうか



サマルの漁村の子どもたち。その多くが将来都市に出ることを望んでいた

おかべ まさよし／アジア経済研究所 研究支援部

2011年4月より現職。

ごとう けいすけ／株式会社大和総研

2013年3月東京大学教養学部総合社会科学科卒業。

同年4月より現職。

大学1年の夏に渡比。人々の日常生活の一端に触れたことは東南アジア事業へ関心を持つ原体験になった。

- 《参考文献》
- ① 青山和佳「二〇一〇」フィールドワークを生きる：フィリピン・ダバオ市の『バジャウ』とわたしたちの「一〇年」 青山和佳・受田宏之・小林誉明編 『開発援助が作る社会生活』 大学教育出版。
 - ② 萩原宜之・高橋彰「一九七二」『東南アジアの価値体系：マレーシア・フィリピン』 現代アジア出版会。
 - ③ 中西徹「一九九二」『スラムの経済学』 フィリピンにおける都市インフォーマル部門』 東京大学出版会。

と一体となった一畳ほどの暗がりのスペースで、溜めた井戸水を浴びるだけである。

(3) 水道が未整備のため付近の河川に「投棄」する行為すら日常化している。

(4) もっとこれは、Galing sa nakaw と呼ばれる闇市場に流通する低廉品という性格もある。



P地区に向かう途中のジープニーの車窓から。道路は川のように冠水し、不便で不衛生。下水道の未発達が原因とみられる。この地区に立ち入ることはマニラ中心の人びとですら忌避していた(マニラ中心部からタクシーでCaMaNaVa地域に行こうとすると乗車拒否にあうことも珍しくないという)

